

僕が守りたかった
未亡人が義兄に
寝取られていく

文 内田弘樹
絵 只野めざし



水瀬英雄

水瀬秋子の元夫の兄（義兄）。「北の街」の市議会議員をしている。人格者として知られているが、実際は好色家で、特に熟した人妻を犯すのが好き。かつて関係のあった秋子を再度脅迫し、復縁を迫る。絶倫。

水瀬秋子

「北の街」に住む未亡人。30代後半。夫に10年前に死別され、今は娘の名雪と、居候の祐一と暮らす。かつて英雄に調教されていた。最近、名雪に内緒で祐一と交際していたが、それを英雄に知られ……。



相沢祐一

主人公。●校2年生。この世界線では秋子と付き合うに至った。



水瀬名雪

秋子の娘で●校2年生。祐一と同居中。祐一への想いは本編と変わらないようだが……？

目次

第一章 秋子さんは俺の恋人

∴ 6

第二章 「水瀬秋子、今からお前はワシの雌や」

∴ 40

第三章 家族の前で、家族の場所で

∴ 91

第四章 「私から祐一を寝取った責任、

取ってもらうからね、お母さん」

∴ 145

エピソード 水瀬家の雌

∴ 190

※本書は(株)ビジュアルアーツ／Keyから発売された「Kanon」の二次創作作品として、二〇二五年夏に販売した同人誌を電子書籍化したものです。ただ、登場キャラクターは冒頭で紹介した四名のみで、原作を知らない人にも楽しめる作りとしています。

※本書は成人向けの官能小説です。18歳未満の購読、閲覧を禁止します。

第一章 秋子さんは俺の恋人

1、

俺こと相沢祐一には、好きな人がいる。

水瀬秋子。

俺は「秋子さん」と呼んでいる。

俺の母親の妹、つまりは俺の叔母に当たる人だ。俺は昨年の冬から、彼女の水瀬家に居候させてもらっている。

年齢は聞かずだが、多分、三〇代後半と思う。

水瀬家にはその娘（つまり、俺の従弟）で幼馴染の名雪がいて、俺が来るまでふたりで暮らしていた。

名雪の父……秋子さんの夫はいない。名雪が幼い頃に死別して、名雪は顔も覚えていないそうだ。水瀬家には仏壇を含めて、彼の痕跡を示すものは何もない。秋子さんもそのあたりを自分から話そうとはしない。

それでも、俺は秋子さんが好きだ。いつからそうなのかは覚えがない。

この北の街に来て、いろいろな出会いの中で水瀬家で暮らしているうちに、自然に「そう」なってしまった。

俺は秋子さんの全部が好きだ。

秋子さんの優しい性格も、泰然自若とした様子も、俺と同じ年の娘を生んだとは思えない若々しい顔立ちも、そして普段着でもはつきりとわかるほどの豊満な身体も。

二〇歳近く歳が離れている、母親みたいな女性への、異常な恋だというのは分かっている。

それでも、俺は秋子さんが好きな自分を肯定している。

いや、それだけでなく、その先に進むための行動まで起こしてしまっている……起こして、しまった。

結果、俺たちが今、何をしているのかというと……。

2、

「んっ♡ ふっ♡ むちゅ♡ んふう……♡」

くちゅくちゅくちゅくちゅ……。

俺は秋子さんとキスを……それも、舌と舌とを絡め合う、大人のキスを交わしていた。

土曜の午後三時。場所は水瀬家の秋子さんの部屋。

ふたりの姿勢は……俺も秋子さんもベッドに寝転がり、横になって身体を正面から触れさせながら。

恰好は俺が部屋着のジャージ上下、秋子さんは紫色のネグリジェと同じ色合いの刺繍のシヨーツ。

秋子さんはついさつきシャワーをあびたばかりで、甘いシャンプーの香りが俺の鼻孔を刺激する。

つまり、俺たちは、そういう関係、というわけで……。

「ふっ♥ んぶっ♥ じゅる♥ はふうう……♥」

甘く艶のかかった吐息を吐き出しながら、俺と濃厚なキスを交わす秋子さん。俺も負けじと舌を絡ませ、自分の唾液を秋子さんの口の中に流し込む。

自然に俺の手は秋子さんの胸元や太もも、そして股下に向かい、いろいろな所を擦ってしまう。秋子さんの手も、同じように俺の下半身に向かう。

ムクムクと湧き上がる性欲。それに合わせて、俺の分身も次第に固くなってしまふ。

俺と秋子さんが唇を離れたのは、俺の男根が、もう十分、と思えるくらいまで大きくなつたあたりだった。

秋子さんは左手で俺のあそこをひとなですると、口を離して、羨望を込めた微笑みを浮かべた。

「ふふっ……♡ さすが高校生。元氣ね。キスだけでこんなになるなんて」

「嫌味としか受け取れないですよ。名雪産んで、これだけ綺麗で、こういう時に俺に負けないくらい元氣で」

「ふふっ、おばさんを褒めたって、何も出ませんよ」

「またそう言って……十分出てますよ。特にこのあたり」

「んんっ……♡」

秋子さんの胸元の双房を、ネグリジェごしに両手で軽く掴み、揉みしだく。

大きさは間違いなくGカップ以上……名雪も大きいが、秋子さんはそれに輪をかけて大きい。こうして目の前でみると贈答用のメロンが二つ並んでいるかのようだ。

張りと弾力もたっぷりで、指を沈めればその分だけ押し返して来る。それでいて柔らかさは特級で、まるで練りに練ったマシユマロのよう。

本当に女子高生の母親とは思えない。

「んっ♡ はっ♡ ひあっ♡ んんんふう……♡」

俺の両手の胸元への愛撫に、甘ったるい息遣いを漏らす秋子さん。

俺はその行為の中に違和感を覚え、動きを止める。

「ど、どうしました、祐一さん……？」

「い、いや、最初の頃より、胸の大きさと重量感が少し増えているような……」

「ああ……それは本当です。私の胸、この歳で、さらに大きく、重くなったみたいで……」
まじか。

「ふふっ♡ 祐一さんという、新しい恋人に毎週揉まれているからですね……♡」

嬉し恥ずかし、といった顔で微笑む秋子さん。

ぐっ、可愛い……。自分の親ほどの年齢の女性にこんな感情を抱く俺は本当に異常だ。
とはいえ、そう生まれてしまったのだから仕方がない。

——俺と秋子さんが恋人同士になったのは、俺が水瀬家で暮らすようになって数か月後の春休みあたり……。俺が秋子さんへの恋心を自覚したすぐ後のことだ。

きっかけは、あまりにも予想外の出来事だった。

俺が秋子さんの自慰を目撃してしまったのだ。

あれはたしか、俺は補習を受けるため、名雪は部活動（陸上部）のために朝から高校に向かった後、俺の受ける補習が担当教師の病欠で中止になり、名雪を高校に残して水瀬家に先に帰った時で……。俺が居間に入った瞬間、ばっちりそのシーンに出くわしてしまった

のだった。

秋子さんが俺の帰宅に気付けなかったのは、秋子さんがあまりに激しく声をあげて乱れていたからで、俺はまさにそのシーンを直視することになった。

おかげで、そのときはお互い大慌てで、秋子さんは普段では考えられないようなしどろもどろな態度で言い訳して、俺はあまり大慌てで居間から飛び出して……。

で、お互いに気持ちが悪く着いた後、俺は秋子さんから事情を伺ったのだった。

いわく、秋子さんは夫を亡くしてから、他人との性行為は「無沙汰で、そのためか、たまに「激しい」行為を衝動的にしたくなり、はしたなく乱れてしまうこと……。

秋子さんに恋心を抱いてはいたものの、彼女自身は「理想の母親」そのものだと思っていた俺は言葉を失った。

しかし、自分の想いを口にするのは今しかないと思い、思い切って「俺はそんな秋子さんが好きです、付き合ってください！」と告白してしまった。

今度は秋子さんが面食らう番だった。さすがに想像の埒外の展開だったらしい。

俺の言葉に、秋子さんが迷うそうぶりをみせる中、俺は必死に畳みかけた。

別に今すぐ受け入れてもらおうとは思わない。答えをもらえるのなら高校を卒業した後でもいい。今日みたいに性欲が昂ってどうしようもなくなったときは自分をその道具とし

て使ってもらってもいい。

玉碎覚悟の告白だったが……秋子さんは少し考え込んだ後、「それならば、きちんとお付き合ひしましょう」と言ってくれた。

驚く俺に、秋子さんは彼女なりの理由を話してくれた。

たしかに日常を維持するために、誰かと愛し合い、身体を重ねるという行為が私には必要かもしれない。それに、中途半端な関係はお互いのためにならないし、祐一さんも、私で経験を積むことは、今後、「別の誰か」を好きになった時に、無駄ではないだろうからって……。

俺がこれから別の人を好きになるはずがない。きっと一生、秋子さん一筋……俺はそう反論したかったが、我慢して口をつぐんだ。

秋子さんがここまで俺のことを想って承諾してくれたのだ。文句などあるはずがない。

もちろん、秋子さんはその後、「その代わり、名雪にはくれぐれも内密にお願いしますね？」と付け加えるのを忘れなかった。

俺はいうまでもなく頷首した。さすがに名雪にこれを知られるのはまずい。いらぬトラブルを招きかねない。

そんなわけで俺と秋子さんは交際を開始、秋子さんの性欲の解消のため……否、お互い

の欲望のために、ふたりでセックスを繰り返していくことになった。

俺と秋子さんはそれから、日常的にはこれまで通り普段通りに過ごし、ごくごくたまに、家族を装って買い物にでかけたり、名雪の留守を狙ってふたりの時間を過ごしたりと、恋愛的行為を重ねていった。

俺と秋子さんのセックスも、たいていの場合、今のようにな、名雪が部活で帰宅が夕方になる土曜の昼間だった。

誘いをかけるのは俺だったり秋子さんだったり、週によってまちまち。秋子さんの仕事に忙しかったり俺が勉強に忙しかったりで未遂に終わることもある。

また、名雪に外出の予定がなくなると家にいて、その状態でお互いが求めたくなった場合は、ふたりして用事を作って外出して、この街から電車で三〇分ほどの距離にある別の街のラブホで落ち合ってすることもある。ちょうど先週がそんな流れだった。

今日は名雪が通常通り部活だったこともあり、秋子さんからそれとなく誘いを受けて、昼食後、こうして情事に没することになっていた。

秋子さんから誘ってくれた以上、俺は秋子さんで自分が気持ちよくなるだけでなく、秋子さんを自分で気持ちよくしてあげないといけない。

「はあっ♡んあ♡ひあっ♡はっ♡んああっ♡」

俺にバストという肉の果実を揉まれ、気持ちよさそうに喘いでくれる秋子さん。

俺みたいな、ついこの間まで童貞（あ、ちなみに俺にとつての初めてのセックスでも、秋子さんは優しく手ほどきしてくれました。年上最高！）だった男の拙い前戯でも気持ちよくなってくれていることに、俺はちよつとした喜びと、「秋子さん、いつもどれだけ性欲ため込んでいるんですか……？」といらぬ不安を覚えてしまう。

俺はそんな秋子さんの役に立つため、さらに胸を愛でる。具体的には、ネグリジェの上に浮き出る乳首を指でこすったり、前に押し込んでこねくり回したり……。

「ひああああっ！♥ ふあっ♥ ふあああああっ♥」

さつきより気持ちよくなってくれている秋子さん。

俺の両手で豊満なおっぱいやツンと立った乳首が変幻自在にこねまわされる……というのはそれだけで性欲をかきたてるし、胸の上に普段着がまとめてめくり上がっているというのも、日常のエロって感じで堪らない。

俺は欲望の赴くままに先に進む。

「秋子さん、服、上にずらしますね……」

秋子さんの返事を待たず、俺はネグリジェを秋子さんの首のあたりまでずらした。たわなふたつの乳房が露出する。

秋子さんの乳輪の大きさは俺の親指ほどの直径で、他の（といっても、ネットの写真や動画で見ているだけだが）女性よりも少し大きい。真ん中には充血した乳首がぷっくり出ていて、まわりにツブツブが浮き出ている。

俺は向かって右の乳首を指でいじりながら、左の乳首を口に含み、舌で舐めたり、軽く噛みついたりし始めた。ある程度それをする、今度は逆の乳首に食らいつく。

「んあひあつ！♥ それ、ですつ、祐一さん……っ！♥ それえええ……っ！♥」

指での愛撫よりも気持ちがいいのか、秋子さんが俺の頭を右手で胸元に押し付けながら喘いでくれる。

同時に秋子さんの左手が俺の下半身に再び伸び、俺を誘うように自分の股下にくっつけて来る。

「秋子さん」

「祐一、さん……」

切なそうに潤んだ瞳。

普段では誰にも見ることが出来ない……名雪でさえ見たことがない、秋子さんの「おんな」としての相貌。

秋子さんは聖母のような微笑みを浮かべた。

「来てください、祐一さん……♥」

「わかった。挿入（い）れるよ」

秋子さんは頷くと、自分でショーツを横にずらし、股下を露出させた。

その間に俺は枕元にあらかじめ準備しておいたコンドームを手にとって包みを破り、ジヤージとトランクスを下ろして露出させた自分の逸物に手早く嵌める。

秋子さんの陰部は、ぷつくりとふたつの丘（大陰唇）が立ち、その間に赤いヒダ（小陰唇）やクリトリス、膣口の黒い小さな穴が並び、一面ピンク色で黒ずみがほとんどない、処女のように綺麗な造形だった。陰部の上には、控えめな陰毛の森がさわさわと揺らいている。

ここから名雪が生まれたんだよね……と、いつも思ってしまうが、さすがに不作法だと思うので言わない。

俺は秋子さんの両足を左右に広げ、空いた隙間に自分の腰を進めて、ペニスを蜜口へと挿入していく。

ズブツ、ズブズブズブズブ、ズブズブツ！

「んあああああっ！♥」

俺の挿入と同時に婀娜な声をあげる秋子さん。



「う、おおっ……」

あまりの快感に、俺もくぐもった声を盛らす。

気持ちいい。とにかく気持ちいい。

秋子さんのナカ、最高すぎる……。

膣内は別の生き物がそこにいるかのように、ヌメヌメした全体で俺の男根にまとわりついてくる。

膣のきつさも程よく、キュウキュウと締め付けて来る。

とても経産婦とは思えない。

秋子さんのこの極上のあそこ……おまんこが、今は俺だけのもの。

今は亡き秋子さんの夫……名雪の父親に若干の申し訳なさを覚えつつ、この感覚を楽しんでしまう。

「祐一さん……？」

「あ、すみません。いつもどおり、すごく気持ちよくて」

「ふふっ。私みたいなおばさんのあそこが、本当に祐一さんを満足させているか、ちよっと自信がないわね」

「そんな、自信もってください！ 秋子さんのここは最高です！ 俺は秋子さん以外につ

いては知りませんが……とにかく、俺はそう思います！　とにかくいろいろ良くて……旦那さんに、愛されていたんだなって……！」

「……………」

「じゃあ、動きます……」

俺はそういつて、腰を動かし始めた。

最初はゆつくりと、でも、次第にペースを速めながら。

ずちゅ！　ずちゅずちゅ！　ずちゅちゅちゅつ！

「いあっ♡　んあっ♡　あっあっ♡　あああっ！♡」

桃色がかった喘ぎ声を放つ秋子さん。

俺がピストンを繰り出すたびに、綺麗な顔の青みがかった髪が乱れ、胸元がまるみのままに振幅する。

俺も荒い息を吐き出しながら、腰を動かすたびに生じる気持ちよさを堪能する。

ペニスの敏感な部分、特に亀頭のあたりが秋子さんの媚粘膜をこするたびに、言痺れるような快感が生じる。

突くたびに中から愛液があふれ出て、ピストンが容易になっていく。

早くも込み上げる射精欲。俺は陰茎の筋肉に力を入れてそれを押しとどめながら、腰を

俺の手を掴みながら、秋子さんが切なそうに告げる。

「い、いいですよ……♡ このまま、イって……♡」

「秋子さん……」

俺が絶頂寸前なことくらい、楽に看破できるのだろう。

「そ、そのかわり、もっと激しく、激しく……っ！」

俺の手を掴んでいる秋子さんの掌が、ぎゅっと締まる。

「私のあそこを……っ♡ 滅茶苦茶に、してえ……♡」

「秋子さん……っ！」

ずくずくずぶずぶちゅちゅ！

ずくずくずぶずぶちゅちゅ！

「んあひい！♡ あっあっ♡ んああああっ！♡」

力と体力の限りを尽くして自分のペニスを秋子さんのおまんこに抽送し続ける。亀頭に生じる快感は気持ちよさを通り越して痛いと思えるほどだ。

けど、これくらいをしないときつと秋子さんを満足させられない。少なくとも男としての意地は見せられない。

ぐじゅぐちゅぐちゅ！

パンパンパンパン！

「あっ♥ はっ♥ ふはああああっ！♥」

性器同士が擦り合わさる音、肌と肌がぶつかるとの音、秋子さんの啼き声が同時に響き、淫らな三重奏を奏でる。

俺という雄と秋子さんという雌が文字通り獣のようにまぐあいながら快感を貪り合い、腰を打ち付け続ける。

やがて……。

「うっ、秋子さん、出る……っ！」

俺はそう呻きながら、渾身の力で秋子さんのできるだけ深くに肉槍を突っ込み、同時に射精を放った。

どぴゅ！ どぴゅどぴゅどぴゅ、どぴゅどぴゅどぴゅ！

「んっ♥ ふあああっ♥」

秋子さんが緩い喘ぎを放つ。

イってはいないらしい。けど、気持ちよくなってくれているのは確かなようだ。

その代わり……かどうかは分からないが、俺がイった瞬間に、秋子さんは自分からおまんこをぐにぐにと蠢かせて、俺の気持ちよさを増幅させてくれる。

「うっ、ああああっ……」

俺はあまりの気持ちよさに、またくぐもった呻きを漏らしながら、射精を続けてしまう。数秒後、俺の射精は止まった。

俺の脳みそに、達成感というか、征服感というか、満足感というかがこみあげる。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

俺は乱れた息を吐き出しながら、快感の余韻に浸った。気持ちよかった。今回も。

本当に俺は秋子さんとこんな間柄になれて幸せだ。

それこそ普通ならあり得ない話……「奇跡」に思える。

「祐一さん、イけましたか……？」

秋子さんが呼吸を乱しながら、伺うように尋ねて来る。

俺はニカッと笑って答えた。

「も、もちろん、すごく、すごく気持ちよかったです！」

「もう、祐一さん、セックスのときはそればかり」

「他に言葉が見つからないので……。あと、今回も俺ばっか気持ちよくなって、それも申し訳ないかなって……」

不思議そうに首をかしげる秋子さん。

俺は情けなさやむずがゆさを覚えながら、正直に本心を吐露する。

「秋子さん、イケてないですよね……？　不甲斐なくて、すみません」

「ふふふ。了承♥」

いつもの決め台詞をここぞばかりに口にしてくれる。

「イケてないのは確かだけど、私は、そういうことが起きにくい体質みたいだから……気にしないでいいわ。大丈夫、私もすっかり気持ちよくなれて、モヤモヤを解消できたから」

「そ、それならいいんですが……」

「ええ。本当、助かるわ♥」

俺の額を優しく撫でてくれる秋子さん。

きつと名雪が落ち込んだ時も、こうして母親として慰めていたのだろう。

秋子さんはその愛情を今、俺だけに注いでくれている。

胸が幸せと充実感でいっぱいになる。

「でも……どうしてそう思ったのかしら？」

「え、どうしてって？」

「さっき、私の夫に愛されていたのが分かるって」

ああ、さっきの俺の台詞についてか。

俺は恥ずかしさを感じながら、説明を試みる

「いや、その、秋子さんの、その、あそこは、とんでもなく気持ちがいいから……きつと秋子さんは、旦那さんといっぱいセックスして、そうなるように訓練というか、練習というかをしたんだろうなって……」

「そう……」

秋子さんは一瞬、寂しそうで辛そうな表情を浮かべたが……俺にそれについて何かを思う前に、すぐに優しい微笑みを浮かべる。

「祐一さん、ありがとう。あの人も……きつと、祐一さんに言ってもらえて嬉しいと思っているわ」

「……………」

ここで秋子さんの過去、特に旦那さんについて質問するは簡単だった。もしかするとこのピロートークみたいなタイミングなら、秋子さんなら、素直に話してくれるかもしれない。

けど、俺はそうしなかった。

無粋に思えたし、負けを認めるようなものだったから。

俺は男として、自分の力で秋子さんの全てが欲しい。

元の旦那さんを含むところはないけど、それでも、元の旦那さん以上に、秋子さんには俺を愛するようになってもらいたい。

今は秋子さんをイカせられないけど、いつかは……。

「祐一さん？」

「あ、すみません」

俺は心配そうに顔を覗き込んでいた秋子さんに受け答えしながら、秋子さんの臍から自分の分身を引き抜いた。

俺は精液だまりから中身がこぼれないよう慎重にゴムを外し、ティッシュにくるんでゴミ箱に捨てた。

ちらりと時計を見る。

昼の三時半。名雪の帰宅まで二時間以上残っている。

もつと秋子さん、一緒に気持ちよくなりた。

俺のチンポはまだ勃起している。

「あの、秋子さん……」

「了承♥」

さすが秋子さん、俺が何を望んでいるかを、俺が口にするまでもなく察してくれる。

「まだ、時間はあるみたいですし……祐一さんは若くて元気だから、これだけじゃ満足できないでしょう」

「じゃ、じゃあ、二回戦、いいですか……？」

「いいですよ。じゃあ、今度は私が上に跨りますね」

「大丈夫ですか？」

「まだまだ若い人には負けられませんので。それに、騎乗位は自分で気持ちのいい部分を探しながら動けるので、私、嫌いじゃないんですよ」

俺も秋子さんとの騎乗位は嫌いではなかった。というか、実はかなり好きだ。

特に、お互い繋がりがりながら腰を上下に振っている時が。

だって……その体位の秋子さんは、大きなおっぱいをバインバイン揺らしながら俺のチンポで喘いでくれて、俺はその大迫力エロの光景を、真下から見られる。

「じゃあ、お願いします……」

「了承♥」

秋子さんは優しく微笑みながら、仰向けになった俺の上に伸し掛かろうとした……その瞬間だった。

来客を示す、玄関のベルが鳴ったのは。

3、

「おや、君は……？」

大慌てで服を着て秋子さんの部屋を飛び出し、階段を駆け下りて玄関のドアをあけた俺の目の前に現れたのは、見知らぬ男性だった。

歳は四〇から五〇くらいだろうか。

恰好は上が白いワイシャツに青いネクタイ、下はスーツのズボン。いずれも折り目がはっきりしていて、きちんと仕立てられているのがわかる。

顔立ちはかなり濃く、額には汗が油のようにテカリながら張り付いている。

体格はそこそこ。ただ、全身に筋肉がついていて張りがあり、肌のくすみも少なく、実に健康で元気そうだ。

おそらく、かなり裕福な暮らしをしているのだろう。纏っている空気だけでそれがわかる。

ええと……誰？

驚きでフリーズしてしまっただが、相手の方が先に質問を投げたことに気付き、俺は背筋

を伸ばして応じる。

「あ、ああ、すみません。俺はこの家に居候させてもらっているものです」

「居候？ 名前は？」

「相沢祐一です」

「あ、なるほど！ 秋子ちゃんの妹の息子さんかあ！ 前に秋子ちゃんに写真見せてもらったことあるわあ。赤ちゃんの頃やったかなあ。大きくなったな〜〜！」

不自然に馴れ馴れしい秋kさんの呼び名や言葉遣い。

なんだこいつ。

なんで俺のことを知ってる？ なんで秋子さんを、秋子ちゃん、なんて呼ぶ？

俺の内心を察してか、男は苦笑しながら手を振った。

「ああいや！ 警戒させてしまつてすまんなあ。ワシはこういうもんや」

男は胸のポケットから、鱔皮製と思われる名刺入れを取り出し、俺に名刺を渡した。

シンプルなデザインの名刺には、「水瀬英雄（みなせひでお）」と書かれていた。

「水瀬……？ つてことは、秋子さんの旦那さんのご親族……？ で、この街の市議会議員……！！？」

秋子さんは俺の実家で本家である相沢家から、旦那さんの家に嫁いでいった立場だ。だ

から、水瀬の名字を持っているのなら、当然、旦那さんの親類になる。

水瀬家にこの街で議員をしている人がいることは、母親からいつか聞いたことがあった。なんでも、郊外への大企業の工場の誘致に成功して、街の発展に大きく貢献したとか……。

「そうや。秋子ちゃんの旦那さんの兄……秋子ちゃんの義理の兄ってことになるな。恥ずかしながら、この街の皆さんのために頑張らせてもろうとるわ」

目の前の男……水瀬英雄は口元を緩ませて頷く。

「秋子ちゃんとは、ワシの弟が秋子ちゃんと結婚してからの仲や。いうても、弟は秋子ちゃんのお腹ん中に名雪ちゃんがまだいる頃に病気で亡くなってしまったけど……弟が早くに逝ってしまったおかげで、秋子ちゃんにはホンマ苦労かけとるわ……」

「は、はあ……」

「秋子ちゃんも名雪ちゃんも外出中か？　なら……」

「英雄さん……？」

背後の階段から秋子さんの声。俺は思わず振り向いた。

秋子さんは服を着た状態で、俺が見たことがないくらいに目を丸くして、玄関を見ていた。

男はパァッと表情を明るくした。

「おお！ 秋子ちゃん、久々やなあ！ 最後に会ったのは名雪ちゃんがまだ小学校に上がったか上がらないかの時期やったから、一〇年ぶりくらいかあ」

「え、ええ……お久しぶりです」

「うんうん、その分やと名雪ちゃんも元気そうやな。きつと若い頃の秋子ちゃんと同じように、べっぴんさんに育つとるんやろうなあ……！」

「は、はい、おかげさまで……」

秋子さんはどういふわけかくもった表情だった。

「それで、何か御用で……」

「いやなに、この一〇年ほどは仕事で忙しかったんやが、ようやく一段落したんで様子を見に来たんや。法事にも顔だせんですまんな。秋子ちゃん、今までひとりでよう頑張つて来た。弟の英次も、あつちで安心しとるやろ」

「……………」

「本当に今日は顔を見に來ただけや。名雪ちゃんに会えんかったのは残念だが、ま、それはおいおいやな」

男は俺に視線を向け、ニコニコ顔で告げる。

「祐一君、居候ということは、秋子ちゃんに世話になつとるんやな。秋子ちゃん、料理上手やろ？ 毎日美味しいご飯、食わせてもらつとるやろ？」

「えっ！？ は、はい。秋子さんの料理は、絶品で……」

「そうやろそうやろ。英次もそこをよく褒めとったわ。ホント秋子ちゃんは、あいつにはもったいなかったくらいによく出来た嫁さんや。祐一君、秋子ちゃんをよろしく頼むな？ 秋子ちゃんをよう支えてやつてな？」

「も、もちろん、です……！」

「ええ返事や！ 男は女子供を守ってこそや。こないなしつかりした居候クンがおるなら、こっちの家も安泰やな。いやあ、良かった良かった。じゃあな秋子ちゃん」

「え、ええ……、英雄さん」

男は手を振りながら出て行った玄關の戸が締められる。

俺は、驚きで無言となつていた。まさか、こんなかたちで、秋子さんの元の旦那さんの親戚と出くわすなんて。

いやもちろん、秋子さんの旦那さんの名前が「英次」で、亡くなったのが、名雪がまだ秋子さんのお腹の中にいた頃というのがはつきりしたのも、驚きだけど……。

「秋子さん……？」

「あ……はい、祐一さん？」

ワンテンポ遅れて秋子さんが返事をする。

秋子さんも、久々の出会いに、驚いているらしい。

俺はなんとなく違和感を覚えながら、言葉が続ける。

「あ、いや、すごく個性的な方、だなって……」

「英雄さんのこと？　そ、そうね……」

「あと、市議会議員って……なるほど、だからあんなピシっとした恰好……。名刺入れも高そうだったし……」

「……………」

「秋子さん、大丈夫ですか？」

「え……？　ええ、大丈夫。ごめんなさいね、突然のことで、私も驚いてしまった」

いつものように、朗らかな微笑みを浮かべる秋子さん。

「あと……先に応対させてしまつて、ごめんなさい」

「いやいや、あの状況では、俺が先に飛び出ていくのは当然ですよ。女性は、その、男よりも大変ですし」

「……すつかり、氣勢を殺がれてしまいましたね」

秋子さんが残念そうに呟く。

確かにそうだった。さっきまであれだけ元気だった俺のナニは、今話している間にすっかり萎えてしまい、シオシオに小さくなってしまっている。

もちろん、これからふたりで秋子さんの部屋に戻って仕切り直しというもないわけじゃない。

しかし、セックスにおいては雰囲気とか情緒が大事になる。はつきりいつて、もうふたりにセックスするという雰囲気でもなくなってしまった。

うぐ。なんか悔しい。誰が悪いというわけじゃないが。

秋子さんも不完全章な表情で、同じ心境らしい。

秋子さんははあつ、と大きくため息をついた。

「とりあえず、お茶にしましょうか。ちょうど、美味しい洋菓子を買っていたので」

「わかりました。ありがとうございます」

「どういたしまして。……これも、祐一さんと過ごす、大事な時間ですから」

「はい」

秋子さんとセックスするのは気持ちがいいけど、こうして秋子さんとゆっくりふたりきりの時間を過ごすことにも、俺は幸せを感じられる。

ま、こういう日だってあるさ。焦ることはない。秋子さんと俺との日々は、まだまだ続いていくんだから。

突然、秋子さんは思いがけない一言を告げた。

「けど、名雪のことも、大切にしてあげてくださいね？」

「名雪？ どうしてこの流れで名雪が？」

「それは秘密です♥」

「はあ……」

そういつてふたりして居間に戻り、俺がダイニングの椅子に座り、秋子さんがキッチンに向かった。

その時、ポロリン、と、秋子さんのスマホが鳴った。

秋子さんは何気ない動作でスマホの画面を眺め、すぐにキッチンの脇に液晶を下にして置いた。

「どうしたんですか？」

「何でもないわ。ただの迷惑メール」

「最近、多いですからねえ」

「困ったものよねえ」

秋子さんと笑い合う。ああ、やっぱり秋子さんの笑顔は可愛い。俺の理想の女性（ひと）だ。

さっきの男の台詞じゃないが、俺はこんな秋子さんを支えられる男になりたい。秋子さんの笑顔を守りたい。

セックスを邪魔されたのは腹立たしいが、あの言葉だけは正しい。男は、大切な女や子供を守ってこそ、だ。

秋子さんの優しい微笑みを見つめながら、そう思った。

3、

From: 水瀬英雄

ご無沙汰やったな、秋子。

一〇年ぶりやが、ワシ好みのべっぴんの熟れた女になつとるようで、嬉しいわ。

にしても、さっきはさすがのワシもびっくりや。

秋子、お前、してやたる？

あの居候クンと、セックス、してたやろ？

気付かれんと思ったか？

居候クンからも、お前から、雌マンコのくっさい臭いがプンプンや。

相変わらずの淫らな身体やなあ。

さすが、ワシがしつけた雌なだけあるわ。

ま、そうでなくても、お前が居候クンと「しとる」ことは、わかつとったがな。

添付の画像。ワシが先週に隣町で偶然お前らを見つけて撮影した時の写真や。

ふたりしてラブホから出て来とったな。

ラブラブに手エ繋いで歩いとったな。

お前にしてはツメが甘いなあ。

約一五年ぶりに本物の恋人ができて油断しとったか？

sonでもって、念のため顔を見に行ったらアレや。

救いようのない淫らなマンコもちやなあ。

娘の名雪ちゃん、毎日、とっても仲良く居候クンと登校して、一緒に仲良くランチして
いると、同じ高校通つとる子供のいる親御さんから聞いたとるで。
居候クンのこと、きっと大好きなんやろうな。

名雪ちゃん、どう思うやろうなあ？

自分の母親が、自分の生まれる前から、義兄のワシに抱かれていて。

自分の本当の父親が英次でなくワシで。

英次は托卵の事実を知らんまま、お前を信じて死んで。

しかも今の母親は、自分を差し置いて、おちんぼ欲しさに居候クンとおまんこしまくつ
とる、なんて知つたら。

もちろん、一〇年前の写真と映像、そして先週の写真という証拠付きで。

そないなことになったら、水瀬家は終わりやなあ。

お前が英次から託されたモノ全部、パアやなあ。

明日一五時にワシの家や。

来んかったら、お前の家族に全部バラす。

一〇年ぶりの交友を楽しみにしとるで、「水瀬」秋子ちゃん。

第二章 「水瀬秋子、今からお前はワシの雌や」

1、

「せ、説明は、してくれるのですよね……」

翌日。午後三時過ぎ。

水瀬秋子は、義兄の要求どおりその自宅を訪ね……今は和室で英雄と座敷机を挟み、正座で向かい合っていた。

市議会議員だけあってか、英雄はこの街で有名な資産家だった。自宅は並の一戸建ての倍の広さで、和室は八畳ほどもある。

和室の隣は畳の寝室で、ふすまで仕切られている。

秋子にとっては、一〇年以上前、何度となく訪れた場所……出来れば、二度と近寄りたくない場所だった。

この男の本性は、イヤというほど知っている。

「説明？ 何の話や？」

英雄ははだけたYシャツにスーツのズボンという格好であぐらを組み、顔をニヤつかせて応じた。

「と、とぼけないでください！　今さらになって、私をここに呼び出した理由です……！」

「そんな、決まってるやろ。お前と……秋子ちゃんと『仲良く』するためや」

英雄は煙草に火をつけて、美味そうに紫煙を吐き出す。

煙は秋子の顔に向かうが、本人はお構いなしだ。

「この一〇年、お互い大変やったからなあ。ワシは議員の仕事が忙しゅうなってお前にかまってやれなくなり、お前はひとりで子育てと仕事。いやあ、悪いことをした」

英雄はせせら笑った。

「せやけど一〇年が経って、ワシにも少し余裕が出来て、お前の様子が気になっていた……というタイミングで先週のアレや。なるほど、お前も一〇年経って余裕ができて、思ってたわ。それも、名雪ちゃんという、居候クンに懸想している娘がありながら……」

秋子は無言のまま、膝上の両手をぎゅっと握りしめる。

「そんなわけで、また『仲良く』しよう思ってた。お前はこれまでどおり家族円満で幸せな生活を守るため。ワシは性欲処理のため。どや？　悪くない取引やろ？」

「……………」

「黙ってたら分からんで？　それとも何か？　この話、名雪ちゃんと居候クンに包み隠さず教えていいんか？　居候クンは幻滅で済むが、名雪ちゃんはどうかやろなあ？　好きだ

った幼馴染を寝取られただけじゃなく、ニセモノの父親をホンモノと信じ込まされてきたんやからなあ。真実を知ったら、氣イ狂ってしまふかもなあ」

秋子の両肩がブルッと震え、血の味がするほど唇が噛み締められる。

（何の申し開きもできません……今の話に限れば……）

夫の英次が存命だった頃から自分が英雄に抱かれていたのは事実。

その結果、名雪が出来てしまつて……それを秘密にしたまま、今日までを過ごしたことも事実。

幸い、名雪を「出来た」と思われる交わりの数週間前に英次とも交わっていたので、英次は妻の秋子が自分の子供を孕んだと信じたまま、病気で亡くなっていたが……。

（ですが、それもこれも……）

「……まるで、自分には責任がないという言い方ですね」

英雄を睨みつけながら、秋子は重い口を開く。

「誰のせいだ、こうなつたと……！」

「ああ？ 法事の席でワシがお前を酔わせて隙を見て離れに連れ込んで強姦して、その写真をネタに脅してお前と『仲良う』することになった流れか？」

罪の呵責を感じていないように、表では到底口に出れない淫猥な言葉を笑顔で口にする。

「いやあ、あの頃の秋子ちゃんは見物やったなあ。夫の操を立てるために毎回必死に抵抗して、けれども、ワシのチンポの気持ちよさには抗えんで、しまいにはアンアン喘ぎまくるようになって……ま、ワシは性欲がかなりあるほうやし、あの昔からイケ好かなかったクソ弟の嫁を寝取るという欲望には抗えんかったからなあ」

「そ、それだけではありません！ 私が今のような身体に……性欲過多になってしまったのは、あの頃、貴方に毎日のように犯されたからで……！」

「ああ、そうやったな。セックス中毒ってやつか？ それは言う通りだが、悪い話ばかりやなかったら？」

勝ち誇るように微笑む英雄。

「ワシに犯され続けたことで、英次との間ではなかなか恵まれなかった名雪ちゃんという子宝を得られた。お前とワシが秘密をまもったおかげで、英次は自分の子孫を残せたと信じて安らかに逝けた。名雪ちゃんが出来たおかげで水瀬家に残れたし、水瀬家の土地に建てた家に住み続けることもできた。ああ、お前が家のローン返せたのも、ワシの口利きではじめた仕事のおかげやな？ 今だってそれで不自由なく暮らせとるんやろ？ お前はワシに犯され続けたからこそ、今まで上手にやれたんや」

秋子は再び黙り込んだ。

反論したい。でも、出来ない。

今の英雄の言葉もまた事実だから。

自分が夫を失った後も、女として、いや、人としての幸せを得られたのは 間違いないく男のおかげ……。

「まあ、お前が口にした最初の質問……どうして今になってかについては、本音に近い話もあるけどな」

「本音……？」

「L●NEでも書いたが、ワシは熟れた雌が好きなんや。一〇年前のお前はワシの性欲処理役に相応しいだったスケベな身体やったが、まだまだ熟れるには早かった。せやから、ワシのチンコで淫らになる種を植え付けて放置して育てて、熟れた今になって収穫に来た。そんな所や」

「……結局、自分の性欲を満たすため、ですか」

「それはお前も同じや。あの居候クンをたぶらかして、性欲処理しまくっとる」

「いいえ。祐一さんは、私のことを本当に好きになって……セックスだって、合意の上です」

「だったら拒絶すれなよかったやないか。聡明なお前や。名雪ちゃんの気持ちにだって気

付いとったんやろ？」

「……名雪も祐一君もまだ子供です」

秋子は目を伏せながら続けた。

「私が祐一君の若気の至りというべき想いを受け止めなければ、ふたりとも不幸になる……あと数年もすれば、祐一君は私に飽きるでしょうし、名雪の想いにも気付くはず。私は、それまでの代わりになればいい……」

「さすが、何でもお見通しの秋子ちゃんって感じやなあ。賢しらで薄っぺらいわあ。そんな考えやから、ワシのような下衆に付け入るんや……でも、せやかていうて、居候クンのセックスに満足しとわけやないな？」

「……ッッ！」

もつとも突かれたくない所を突かれた——秋子は表情をより強張らせ、全身をビクンと震わせた。

英雄は秋子の反応を見てニヤリとすると、煙草を乱暴に灰皿に落ち着け、ゆっくりと立ち上がった。

そして、秋子の背後に近づき、三つ編みにまとめられた髪を手に取り、鼻に近づけて香しそうに臭いをかぐ。

「クンクン……懐かしい秋子の髪の毛の臭いや。淫らで不仕丁（ふしだら）な雌の臭いや。けど、何か物足りなさを感じさせる……ワシに初めて犯される前のような」

正座の姿勢で背筋を伸ばし、正面を向いたまま、悔しそうに奥歯を噛み締める秋子。

「……昨日はお前から、あの居候クンからも、この臭いがプンプンしとった。わかつとるで。お前は居候クンとセックスに明け暮れてはいるものの、その実、欲求不満なんや。お前は名雪ちゃんを裏切って居候クンと愛し合っておきながら、その行為に満足してないんや」

英雄の鼻先は秋子の肩や胸元、果ては胸部の先端……乳首の正確な位置にさえ突きつけられる。

まるで、その位置を英雄の身体が……いや、口元が完全に記憶しているように。

「秋子、お前の雌の臭いをワシは全部覚えとる。お前の性欲が完全に満たされとる時も、満たされてないときも。この臭いは間違いなく後者。それも、絶頂を久しく経験してない臭いや」

秋子の精神を言葉でいたぶるように英雄は続ける。

「お前、一度も居候クンとのセックスでイってないんやろ？ 本当はイキたくて仕方がないが、居候クンのチンポが小さくてセックスがクソ下手で、出来ていないんやろ？ 英次

の時と同じようになあ」

「そ、そんな、ことは……」

「下手に居候クンと頻繁に交尾しとるから、ムラムラがたまらなくなっているんや。それをお前は得意なボーカーフェウスでごまかしている。せやろ？」

秋子は反論できなかった。

この話も事実だったから。

祐一とのセックスで、性欲が完全に解消されたことは、実は一度もない。絶頂も一度もない。

英二が生きていた頃と……英二と性行為を繰り返していた頃と同じように。

自分を女として完全に満足させることができたのは、後にも先にも、英雄だけ……。

「結局、お前はワシが相手じゃないと、完全に性欲を発散できないんや。でかいチンポと上手なセックスじゃないと満足できない、ワシにしか救えない雌なんや」

祐一よりも大きな浅黒い掌が、秋子の胸元を覆う。

そして、ゆつくりと撫でまわしていく。

「ん……ッッ！」

祐一の、荒々しいだけの愛撫とは全く違う、女体とを知り尽くした男だけに可能な、ね

つとりとした動き。すぐに胸元に熱がこもり、呼吸も不規則になる。

たぶん、たぶんと胸元を緩やかに揺らしながら、英雄は秋子の耳元で湿った声で囁き続ける。

「もつとも、一番可哀想なのは名雪ちゃんや。嘘で塗り固められた水瀬家で、届かない想いを抱えたまま孤独に暮らしておる……いっそのこと、ワシが『おんな』にして、孤独から解放してやろうか」

「な、名雪を巻き込まないでください！ 約束が違——」

「約束？ 現状でワシがお前に約束したのは、昨日のメールで、今日ここに来なかったら全部をバラす、ということだけや。別にワシが名雪ちゃんと『仲良く』しても、約束を破ったことにはならんわ」

「あの子は貴方と血が繋がっているんですよ！？」

「妹の子供とやりまくりのお前が言える台詞やないで？ それに、名雪ちゃんは確かにワシとお前の子供やが、おかげでお前と同じように、さぞ淫らな身体に生まれたはず……ワシが色を教えれば、たちまちに染まるやろうな」

「や、やめてください……！ お願いだから……！」

「だったら、お前が出来ることはひとつやろ？」

秋子への最後通告を口にする英雄。

「別にお前を家に帰してもかまわんで？　ワシが何もせずとも、これからお前も居候クンを今以上に求めるようになる。そうなれば名雪ちゃんもいずれ察する。何せお前の娘や。そうなれば……水瀬家は終わりや」

「……ッ！」

「お前を満たせるのはワシだけや。水瀬家の幸せを守るために何をするべきか、本当はわかっとるんやろお？」

秋子の乳房を弄びながら質問を続ける英雄。

セーター越しでそれほど激しく揉んでいないにも関わらず、秋子の頬は上気し、呼吸は乱れ、胸元も張り、服の上からはつきりと分かるほど乳芽が浮き出ている。

抵抗の術はなかった。

秋子のがつくりと顎を下ろしてうなだれ、耐えがたいものを耐えるように低い声で応じる。

「わかりました……。ですが、お願いがあります……」

「んん……？」

「今日だけにしてください。今日一日だけは、私の身体を好きにして、構いませんので…

…

「一日イ？ 何を呆けたことを言つとる。ワシの性欲がたった一日のセックスで満たされるはずがないことを、お前も知つとるやろ？」

「……………」

「とはいえ、ワシも時間が出来たとはいえそれほど暇ではないし、お前も仕事と家庭があるからな。それに、期限がないのも緊張感が失せてつまらん。そうなる……………」

英雄はニヤリとして秋子に告げる。

「一週間や。一週間、お前の身体を好きにさせろ」

「い、一週間……………」

「一日じゃ短すぎるし、一か月だと長すぎる。せやから一週間や。それでお前とワシは完全に縁切り。どうや？」

「わ、わかりました……………」

秋子は頷いた。英雄の真意は分からないが、一週間で全てが終わるのなら、家族への誤魔化しもきく。

「ほな、交渉成立や」

「んくう……………っ！♥」

唐突に秋子の乳房を両手で握りつぶしながら、英雄は加虐心たつぷりにほくそ笑んだ。
「水瀬秋子、今からお前はワシの雌や」

2、

「んあっ♥ あっ♥ はあああっ！♥」

「もう声が抑えられんか。早すぎるで」

「そ、そんな、ことはあ……♥ んんんっっ！♥」

数分後。秋子は和室の隣で、英雄との「仲良し」を始めていた。
姿勢としては、畳の上に敷かれた布団の上に腰を下ろした英雄の腰の上に座らされている。

上着は昨日の祐一とのセックスと同じように首元にめくり上げられ、ふたつの乳房がすでに露出している。

乳房は英雄の掌で覆われ、先ほどと同様にゆっくりと揉みしだかれている。ただ、英雄の指先のいくつかは乳首に触れ、胸への愛撫と連動して、乳首も弄っている。

もみゅ、もみゅ、もみゅ……。

カリカリカリカリッ！ カリカリカリカリッ！

「ひあっ♡ あっ♡ んあっ♡」

（この指使い、久しぶり……♡ やっぱり上手……っ！♡ あの人よりも、祐一さんよりもお……っ！♡）

こんなことを思っていない、こんなふうにも身もだえてはいけない……理性では理解できているのに、身体が自動的に反応してしまう。

（やっぱり、一〇年経っても、私の身体は……っ！）

「ふうむ、反応が思ったよりも強いな。さては秋子、お前、あの居候クンには、お前好みに気持ちよくしてもらつたらんな？」

秋子の反応を楽しそうに眺めながら、英雄が尋ねた。

「居候クンは高校生。Hの経験はほとんどないはず。もしかすると、お前が童貞をもらつてやつたんか？ 三〇後半にもなつて高校生の童貞を食うとは……ホンマ、見境のない性欲モンスターやな。恥じらいを知らんか」

「そ、そんな身体にしたのは貴方……っ！」

「確かに、お前はワシのおかげで雌として淫らな空気を振りまく身体になってしまったかな。居候クンがおかしくなるのもわかるわ。だが……当然のように、セックスはまだまだやな」

乳首に触れる指の動きを激しくしながら、続けて言う。

「お前の一番好きな胸の弄られ方は、こう、掌で乳房を優しく揉まれながら、乳首を激しくコスられることや。ほら、あつという間に乳首が膨らんできたで」

「ツッ！」

「そして、胸をイジられながら、これするんが大好きや」

「んひあああつ♡ そこっ♡ だめえ……っ！♡」

英雄は秋子の右の耳たぶをチロチロと舐め始めた。

乳房への緩急のついた愛撫の気持ちよさと、耳へのこそばゆい気持ちよさが同時に襲い掛かり、秋子は大きく身体をくねらせる。

英雄は耳の後ろや首筋、鎖骨の当たりまで舐めまわす。それも、あくまでソフトに……焦らすように

「ひあつ♡ んっ♡ はふんっっ♡」

「どうせ居候クンのセックスは勢いしかない雑なセックスやろう？ それはそれで名雪ちゃんのような同年の女の子とのセックスでは通用するが、お前のような開発され尽くした、歩くおまんこには不十分やろなあ」

「そ、そんなことは……っ！♡ 祐一さんは、あれでもきちんと、私を愛して……♡」

「だったらこれはどうや？　こんな可愛がれ方、お前は居候クンにされていたんか？」

「んひいいいいいっ！　♥」

突然の甲高い嬌声。

それまで左の胸を弄っていた英雄の左手が、今度は秋子のスカートの下のショーツの上に上から滑り込み、クリトリスを摘まんだのだった。

電流のような快感が秋子の脳天に伝わる。

英雄は肉粒をさらに強く摘み、上下左右にひっぱったり、両指でコスったり、真下に押し込んだりする。

「んひああっ♥　あっあっあっ♥　はんふううっ！　♥」

「ここも反応が強い……あの居候クンとのセックスでは、ここをあまり弄られることはなかったようやのう。まあ、前戯でお前が一番気持ちよくなれるトコがここというのは、ワシしか知らんことうあからのう。居候クンだけでなく、英次も……お前の愛する夫も知らなかったようだからのう。よほどタンパクなセックスだったんじゃないのう」

「え、英次さんの……あの人の悪口は、やめてください……っ！　もうここにはいないというのに……！」

「ここにはもういないから好き放題に言っとるんや。おい英次、あの世でみとるか？　お

前の大好きだった嫁はお前が生きている間に兄に寝取られ、最近は何端もいらない高校生の親戚に寝取られ、今度はまたワシに寝取られようとしとるぞ？ 悔しいか？ 悔しかったら幽霊にでもなつて出てきてみて？ げはははは！」

「あ、貴方という人は……！ んあっ♡ ひっ♡」

「相変わらず威勢は良いが身体は正直やな？ 声がだんだん高くなつとるし、あそこからオツユもドバドバ出とるで？ あの世界の英次に見られとると思つて興奮して来たか？ ほんまお前は淫らな未亡人やのう？」

「やっ♡ ちがっ♡ はふああああっ♡」

より激しくクリストスを弄られる。

肉芽を覆つていた薄皮を剥き、露出したピンク色のとがりをねちっこく指で転がれたり、爪先でカリカリカリッと引つかかれる。

その度に陰核、そして膣のあたりに強い快感が生じ、ナカが自然に潤んでしまふ。

英雄の言葉通り、今の自分の痴態を天国の夫が見ていると思えば思うほど、堪えようのない背徳感も覚えてしまふ。

もちろん、胸や耳元への愛撫も並行して続けられている。

祐一では絶対にこんな前戯はしてもらえないだろうという落胆と、少なくとも今はこの

前戯で気持ちよく慣れているという満足感が同時に襲い掛かる。

（だ、だめ、そんなことを思つては……っ！ 祐一さんは、私を心で愛してくれている……っ！ あの人のように……っ！ だから、私はそれで満足しないといけない……っ！ でも、でもお……っ！）

英雄は執拗に胸と耳まわりと陰核への責めを続ける。

しつこいくらいの長さだが、秋子は流されるままだ。

引き続き迷いのない動き……秋子がこの愛撫でこそ一番感じることを知っているが故の、確信を込めた動き。

「ひあっ♥ あっ、んああっ！♥ ふあああああっ！♥」

「久々にワシに気持ちよくされて、幸せだろう？」

秋子の反対側の耳を舐めながら、英雄が告げる。

「ワシの一〇年ぶりの前戯で喘いでくれるとは嬉しいのう。秋子、さっきは一週間といったが、お前が望むのなら、その後もワシが可愛がってやつてもええんやぞ？」

「ひあっ♥ はああっ♥ ええ……？♥」

「もう一度、ワシと浮気せんか、ということや。別に居候クンと付き合い続けてもらつてもええ。なんなら、毎日セックスしてもらつてもかまわん。そのほうが、ワシとのセック

スの差が如実に感じられるやろうからのう」

「なっ……!!？」

「どうや？ お前が望むなら、いろいろ口をきいてやってもええ。名雪ちゃんや居候クンの受験先とか就職先とかや。なんせワシは議員や。なんぼでも顔が効く」

「そ、そんなこと、許されるつ、わけ……っ！」

「ワシのコネで今の仕事に就いた女の言葉とは思えんのう。何でも自分は被害者で例外か？ ホンマ、女は理屈でなく子宮しかモノ考えられん性の獣じゃのう」

「好き、勝手な、ことを……っ！」

「まあええ。この一週間で、自分からワシの身体を求める雌に戻したる。覚悟せえや？」
(……ッ！ やはり、この男の本音は……っ！)

一週間と期限を区切ってはいるものの、英雄の本当の目的は自分をもう一度、雌に墮とすことなのだ。

英雄の自信のほどは秋子にもわかる。

何しろ一〇年前、自分は今の英雄が望んでいる通りの存在だったのだから。一度出来たことが二度できないいわれはない。

再び英雄の雌になれば、祐一や名雪、そして今はいない秀次を裏切る日々が再び始まっ

てしまう。

（ですから、負けてはダメです……っ！　こんな男、許しちゃいけない……！！　たとえ恩義があつても……名雪の父親でも……っ！　私をこんな身体にして、夫を最悪の形で裏切るよう仕向けた、この男を……！）

名雪への愛情に嘘はない。

名雪を健康な身体の子として産めたことについては神に感謝している。誰が父親だろうと、名雪は自分から生まれた子供なのだから。

だが、真実を知らないまま夫を逝かせてしまった過去は、今も秋子の心を強く苛んでいる。

そのフラストレーションが、名雪への深い愛や、祐一を受け入れたことに繋がっているのも自覚している。

だから……この男だけは許してはいけない。

なのに、今の自分は、英雄に触られれば触られるほど、快感を覚えてしまう……一〇年前と同じように。

「はあっ♥ あっ♥ いっ♥ あああっ♥」

「気持ちよさそうやなあ。なにせワシとの、いや、お前にとって一〇年ぶりの『本物の』

セックスや。口ではどうのいうても、身体が滾らんわけはないなあ」

「これは♥ 違っ……っ♥」

「何が違うや。ほれ、おまえの股下をよく見ろ、派手に汁がふきだしとる」

「……っ♥！」

下半身に視線を向けると、英雄に執拗に弄られている肉突起の下、おおきな肉の膨らみで挟まれた溝から愛液が大量に漏れ出し、ショーツを黒く染めている。

「この吹き出しっぷり、よほどお前の身体はワシのチンポを待ったようやのう。あそこから漂うスケベな臭いも昨日とは全然違う、本気で男を誘っている臭いや。本当に水瀬秋子は淫らな未亡人やのう」

「またっ♥ 好き勝手なっ♥ ことをお……っ♥」

「せやけど、秋子は前戯じゃあそこに直接触られるより、このスケベマメを弄られるのが一番好きこと、ワシは知っとるからのう。雌を満足させてこそその雄やからのう。ほれほれほれ」

「んひあっ♥ そこっ♥ そこばっかりイヂって……！！♥ あっ♥ んあああつつっ♥」

しっこく淫豆への責めを中心とした愛撫を続ける英雄。

祐一とのセックスと比べて秋子が感じている興奮はその数倍上で、実際、陰裂から染み

出て来る体液の量も、ショーツを濡らすだけでは飽き足らず、足の付け根を伝ってシートの上に滴り、染みを作るほどになっている。

秋子の息が乱れ、興奮が否応なしに深まる。

そして、ついに込み上げる絶頂への要求。

祐一との行為では一度もなかったから、人とのセックスでこれを感じるのは本当に一〇年ぶりだ。

だが、英雄はその雰囲気をかぎとると、すぐに指の動きを止めて、秋子の官能衝動を遮断する。

たまらず秋子は声をあげた。

「お、お願いしますっ♥ もう、許して……っ！♥ 御豆、ジンジンして、たまらないんです……！♥ イ、イ、イかせて、ください……っ！♥」

「何を甘いことを言うとするんや。ワシとのセックスがどんなもんか覚えとするやろ。ワシとのセックスはお前と居候クンとのセックスとは違う。十分に時間をかけてお前を昂らせて、性の沃土を耕してからが本番や」

「そんな……♥ こんな、こんなの……っ♥」

「一〇年ぶりのワシとの結合や。最高の気持ちよさを味合わせたる。それまではクリちゃ

んの気持ちよさを楽しんどき。ほれ、ほれほれほれ」

「んあっ♡ ゆ、許してっ！♡ イかせてええ……！！♡」

秋子がどんなに声を上げて、英雄は秋子を絶対に絶頂に導こうとはしなかった。

3、

「はあっー♡ はあーっ♡ はあーっ♡ はあーっ♡」

「ふへへ、随分と出来上がったようやなあ」

布団の上でぐつたりと、崩れるように仰向けに倒れ込んでいる秋子を、英雄は睥睨していた。

顎が上がり、口は酸欠時のように蕩けた呼吸を繰り返している。胸元は曝け出され、陰部もずらされたショーツの横に露出したまま。

英雄に弄られ続けたクリトリスは指先のようにぶつくりと膨れ上がり、赤いヒダも充血してピンク色に染まり、蜜口から湧き出た愛液でテラテラと濡れ輝いている。

「秋子、久々のワシの愛撫はどうじゃ？ イキたくてもイケない、ねっとりとした弄り……こんな丁寧な愛し方、居候クンでは到底無理やろ。年季が違うからな」

「そ、んな、ことお……♡」

理性をかき集めて反論を試みる。だが、反論の体をなしていないことは、自分でも重々に自覚している。

（き、気持ちよかった……。一〇年前と同じように、いや、それ以上に……っ！）

だからといって抵抗を諦めていい理由にはならないことは分かっている。しかし、もはや身体も頭も追いつかない。

「ほな、ようやくお待ちかねの、一〇年ぶりのワシの息子との感動の再会や」

英雄はそういうと、膝をついたまま秋子の前に立ち、ズボンのチャックをあけ、トランクスごとずり下ろした。

次の瞬間、ブウン！ と風切る音とともに、英雄の男根が秋子の目の前に振り下ろされながら突きつけられる。

「ふひいっ……！！♥」

思わず声があがる……。久方ぶりの、その威容に。

（や、やつぱり、祐一さんのとは、全然違う……！ 色も、形も、大きさも……！）

祐一のペニスは万事が標準的で、大きさは一四センチから一五センチほど、亀頭の形状からシャフトの太さまで、とりたてて述べるべきものはなかった。

だが、目の前に反り立つ英雄の肉棒は、「常識」という言葉をどこかに置き忘れたような

モノだった。

大きさは二〇センチ近く。太さも見合うもので、少なくとも祐一のその三割は増し。色も赤銅色で、実に使い込まれているのが分かる。

圧巻なのがカリの高さで、少なくとも五ミリはある。まるでこん棒に仕込まれた槍のようだ。

カリの形状も鋭角的で、下方のシャフトには青白い血管がバキバキに浮き出ている。まるで馬のようだ。

（こんなモノで、今の私が、貫かれたら……！）

湧き上がる恐怖。だが、隠し切れない期待も生じる。

英雄は秋子のショーツに手をかけて脱がした。

続いて、完全に露出した股下に自分の長槍を触れさせ、両足をM字に大きく開かせる。

「……んふう……♥」

「なんや秋子。甘ったるい息吐き出して。まだチンコがマンコに触れただけやろ」

「べ、別に、私は何も……っ！ ……それより、外には出してくれるのですよね？」

「安心せえ。ワシもさすがにお前をもう一度孕まず気はない。ギリギリで外で出したる。約束したる……」

英雄は秋子の両足を広げたまま、腰を前に進めた。

ぐじゅん、と湿った音を立てながら、濡れそぼった切っ先が秋子のヴァギナを押し広げ、前に進もうとする。

「……ツツ！♥」

秋子は歯を食いしばった。予想される痛みにも備える必要があつたし……万が一とてもつもなく気持ちよかつた場合、快楽に耐える必要があつた。

一瞬の間を置き、挿入が開始される。

ズブツ！ ズブズブズブツツ！ ズブズブツツ！

「んっ！♥ ふうっ♥ おふう♥ ぬふうううっ！♥」

メリメリと自分の膣内が強引に押し広げられていく感覚。英雄のペニスが先に進むたびに、ザラザラとした亀頭で膣壁がコスられていくのがわかる。

同時に襲い掛かってくる快感。

ゾクゾクとした心地よさが蜜壺いっぱいに広がっていく。

あつという間に英雄の長槍は秋子の肉袋に押し込まれてた。それも、一番奥……子宮口にキスするかたちで。

「ふうう♥ ふううううっ♥」

一〇年ぶりの心地いい圧迫感。

ここまで達することが出来たのは英雄のペニスだけだ。

この男だけが知っている膣奥の感覚。

この男だけが自分に与えられる、膣奥を肉竿で押し込まれる気持ちよさ。

「おおおおっ！ 一〇年ぶりの水瀬秋子のまんこ……っ！ やっぱりきつくて深くて、溜まらんのおっ！」

英雄も気持ちがいいらしい。

「どうだあ？ 秋子お……？ 一〇年ぶりのワシとの合体はあ……？ たまらんだろお？ 懐かしいだろお……？ もう二度と、離れたくないだろお……？」

「だ、誰が、こんな気持ちが悪いモノ……！！❤️」

「そうかあ？ だったら、久々にコレしてやる。秋子、好きだったろお……？」

英雄は両手で秋子の腰を持ち上げ、より前に押し込む。

「ひぎいっ！❤️ それっ❤️ それはああ……っ！❤️」

黄色い声で叫ぶ秋子。一〇年前の記憶が蘇る。

この体位は、英雄のペニスが、秋子のもっとも深い部分まで入り込む、特別な体位なのだ。

秋子の臆と英雄の男根の形がピッタリと一致し、さらにその先端が蜜壺に奥へと押し込まれる。亀頭の先端が押し潰され、子宮口が圧迫される。

「……っ！♥ ……っっ！！♥」

言葉に出来ない悦楽。脳みそが蕩けそうな感覚。

と、次の瞬間、快感の極みのようなものが込み上がる。

（……ッッ！！ これって……！！）

「ま、待ってください、英雄さん……！！」

秋子は悲鳴のように声をあげた。思わず両手で英雄の身体を押しとどめようとする。

「来てる、来てるんですっ♥ このままじゃ……！！♥」

「ふへへ！ 狙い通りや。ほらイケ、居候クンのチンポじゃ一度もイケなかったのにワシのチンポ挿入れられただけで気をやる淫らな身体でイケ！ ほらほらっ！」

「待ってっ！♥ お願いこんな♥ ダメいきます♥ イク♥ イクウウウウウウ！♥」
ビクッ！ ビクビクッ！

一気に快感が解放され、強烈な肉悦があそこから波のように全身に何度も広がえり、秋子を震えさせる。

「んひっ♥ おっ♥ おふおおおおお♥」



足の全ての指をピンと立たせながら、絶頂に喘ぐ秋子。口はだらしく開けられ、唇からは舌がはみ出て、涎が垂れ下がっている。

（ほ、本当に挿入されただけでイクなんてえ……！♥ 一〇年前にも、こんなことなかったのに……♥）

「へへへ、挿入されただけでいったのがよほどショックみたいやな。せやけど、これはもう仕方がないことやで」

秋子と繋がったまま、そしていまだ腰をまともに動かしていない状態で、英雄は優越感たつぷりに告げた。

「この一〇年、お前のおまんこの一番奥は誰にも辿り着けない場所やった。つまり、シオに乾き切った状態。それをワシが入念な前戯で緩ませた上でチンポを一気に突っ込んだ……気持ちよくて当たり前や」

「そ、そんなあ……♥」

「その上、おまんこの浅い部分は居候クンに頻繁に穿られて、中途半端に再開発されて、欲求不満になっとった。当然の帰結や。ワシは最初からわかつたで。何しろ、お前の身体を開発したのはワシなんやからなあ」

「……ッッ！♥」

「さあこれからが本番や。居候クンのチンポなんか見るのもイヤになるくらい、イカせまくつやるでえ……！」

「ええ……っ！？！？ やめてくだ♥ まだイったばかりで♥ 敏か——♥」

英雄は秋子の静止を無視して、猛然と腰を振り始めた。

ずぐっ！　ぐじゅばちゅ！　ぐじゅばじゅぐじゅ！

パン！　パンパンパンパン！　パンパパンパアン！

「おほひいっ！♥ はあっ♥ んひいっ！♥」

今までのねっとりとした愛撫が嘘のように、獣が獲物を食らうかのように激しくピストンを繰り出す英雄。

それを受けるたびに、秋子の淫裂に電流のような快感が生じ、思考が切断されていく。

「んあっ♥ ふひっ♥ あっあっあっ♥ あああああんっ♥ あふひい！♥」

乱れた髪がさらに乱れ、大きなふたつの乳房がぶるんぶんと派手に上下に揺さぶられる。結合部の隙間からは愛液が乱れ飛び、シートに無数のシミを作っていく。

「んあっ♥ はっ♥ ダメ♥ これダメエエッ♥」

「何がダメか言われんとわからんぞお？」

「い、言えないっ♥ 祐一さんや、あの人ため……♥！」

「だったらワシが代わりに言葉にしてやるわ。お前は今、とんでもなく気持ちいいんや」逃げ場を塞ぐように英雄は告げる。

「居候クンとのセックスよりも、英次とのセックスよりも、もしかしたら一〇年前のワシとのセックスよりも。今のワシとお前だからこそその気持ちよさなんや。この一〇年で熟れ切って持て余されたお前の身体だからこそそのヨガリや。お前の本当のオンナとしての人生の幕開けや」

「んひいっ！♥ はっ♥ んあああっ！♥」

容赦なく秋子の雌肉を抉る英雄の肉棒。

カリが大きいためか、英雄の先端や陰茎が媚粘膜をコスるたびに、肉ヒダの一枚一枚が上下にビュルビュルと弾かれ、潰され、埋め込まれ、その度に無数の種類が異なる快感が生じる。

亀頭が子宮口に衝突するたびに押しつぶされて横に大きくなり、狭苦しい膣奥を無理やりに広げる。

秋子が再び絶頂の予感を感じ取ったのは、英雄がピストンを開始してからまだ数分も経たないうちだった。

「そ、そんなああ……！？　　またああ……っ！　　♥」

「さすが秋子や早いなあ！　　またイキそうかあ！？」

秋子とは対照的に、平静を保ったまま腰を振る英雄。

「まだワシは全然大丈夫やで……！　　恥ずかしいなあワシがイカン間に二回もイクなんて……！　　やっぱりお前は清楚な顔して生まれつきのヤリマンやなあ！」

「や、やめてえ……　　♥　　言わない、でエ……ツツツ　　♥」

「言葉責めも性技や。ほらいケ、ワシのチンポでおまんこ突かれまくってイケ！　　自分がワシにしつけられた雌だということを自覚しながらイケ！」

「いやあっ　　♥　　い、イクイクイク、イクウウウ！　　♥」

ビクビクビクビクッ！　　ビクビクビクッ！

再び全身を震わせながら絶頂に達する秋子。

今度は快感を逃すことを拒否するかのように、身体が自分から膝や肘を開けて縮こまってしまう。

自分でもわかるほど雌壺が脈動し、ぐにぐにと英雄のペニスごとそこを歪ませる。

「い……っ　　♥　　ほおおっ　　♥　　んおほおおっ　　♥」

間欠泉のように断続する快感に、陸の魚のように口をパクパクと開閉させながら、淫ら

な吐息を漏らす秋子。

「おつ、おとおおとおつ！ このマンコの暴れるよううねり……！ そう、これが秋子のマンコ、ワシが育てたマンコや！ ワシだけが蠢かせられるマンコや！」

口元から涎を垂れ流しながら……それを秋子の乳房に垂れ下がらせながら、英雄も恍惚とした表情を浮かべる。

「相変わらずお前のマンコは名器やなあ。こんなエグい動きを居候クンとのラブラブセックスで披露できんとは、お前はホント罪な女や」

「はあっ♡ はあっ♡ か、勝手な、ことをお……っ♡」

「事実や。さあ、ペースをあげてくで！」

「んおとおおっ♡ ほおっ♡ んあひいいっ！♡」

じゅ。ぶじゅ。ぶじゅ。ぶじゅ。ぶじゅ。ぶ！

パンパンパンパン！

英雄はさらに速いペースで腰を打ち付けはじめた。

英雄は正常位で秋子の肉溝をどんな角度で穿れば一番速度が出せるかについて、一〇年前に答えを出していた。

二度目の絶頂の余韻にさらに重なる形で、ピストンの快感が秋子に襲い掛かる。

速度が上がった分、媚粘膜の摩擦の強さや子宮口に亀頭がぶつかる数も増え、気持ちよさが倍加している。

「んひいいい♥ あっ♥ あっ♥ んはああああ♥」

（このままでは、またイカされます……っ！♥ 私には英次さんがいたのに、祐一さんがいるのにいいっ！♥）

今、何の抵抗も示さなければ、本当に自分はこの男のチンポに堕ちてしまうかもしれない。そうなれば、自分は再び大切な人を裏切ることになる……。

（そ、それだけ、はああ……っ！♥ これ以上、裏切りを笑顔で隠すのは、大切な人を騙したまま失うのは、もう、イヤ、だからあ……っ♥）

「ふ、ぎいいいいっ♥」

「お、なんや！ 上の歯で思い切り唇噛んどるな！ 痛みでイクのを堪えるつもりか？ 健気やなあ！」

「ンッ、クグウ……！！♥」

「そんなにあの居候クンとの操を立てるのが大事か？ それとも英次への後悔か？ むしろ英次は幸せだったと思うでえ？ 嫁さんを兄に寝取られた上に托卵されたことを知らんで逝ったんやからなあ！ 秋子、お前は托卵されたまま夫を死なせて、あのゴミクズの名

誉を守ったんや、心を守ったんや！ 誇りに思え！ げはははは！」

秋子が口を動かせないことを好都合に、英雄は言いたい放題に秋子を詰る。もちろん、腰の動きは緩めない。

「居候クンも居候クンや。ワシの半分にも見たん若さを盛つとるのに、秋子を満足させられんとは……まあ、それも仕方がないか、秋子のマンコはワシのチンポでしか本当に気持ちよくなれんようカスタマイズされとるからのう。ワシ専用の未亡人生オナホやからのう」
「わ、わたしはあ♥ そんなんじゃ、はんああっ♥」

「居候クンは名雪ちゃんに譲った方が健全や。ほれ、そのためにもワシのチンポでもつとヨガれ、もつと気持ちよくなれ、不純おまんこ、托卵おまんこ、淫乱おまんこ！」

ぐじゅぐじゅ！ ぶじゅくちゅぶちゅじゅ！

パンパンパンパン！ パンパンパンパンパン！

「あふううんつつ♥ んふひいいいっ！♥」

唇を噛んでいてもなお漏れ出る切ない媚息。いつの間にか痛みさえ薄れ、肉悦しか感じなくなっている。

（なんと言われても、私はもう、過ちを繰り返したくないんです……っ！ 英次さん、祐一さん、私に力を……っ！ これ以上、貴方たちを裏切らないために……っ！）

ここではないどこかに助けを求めるように手を伸ばす。脳裏に今は亡き夫の顔を思い描きながら。

しかし、英雄の言葉は、秋子の内心を確実に痛めつけて、その動きさえおっくうにしてみよう。

特に、「祐一を名雪に譲った方が健全」という言葉は。

「んひっ♡ ふぐっ♡ ぬふううううう！♡」

自分を内心で奮い立たせれば奮い立たせるほど、その意思の中の瑕疵に我が身が焼かれ、黒炭になった部位が快楽に浸食されていく。

どんな言い訳をしようとも、自分の最愛の娘の想いを裏切っているのは事実なのだから。と、次の瞬間。

「んふううううう！♡ う、ぐぬふぬううううう♡」

秋子はこれまでになく艶がかった声を発した。

臉が大きく開かれ、大粒の涙が浮かんでいる。

(ダメエ……ッ！♡ やっぱりきた、きちやったああ♡ オーガズムが、絶頂がああ

……！！♡)

壮絶に気持ちいい何かが、弾けんばかりに込み上がってくる感覚。今日三度目の膺イキ

の予兆。

（でも、今度こそ、堪えないと……っ♥！ 相手がイってないのに、三度もイっちゃうなんてえ……っ♥）

「はあはあはあつ、秋子、お前もイキそうなのか……！」
（お前「も」……!?!）

秋子はハツとしながら口を開いた。

「待つて……♥ お願い待つて、英雄さあん……!!♥」

「ああ？ なんやえ？」

「や、約束っ！♥ イクときは外でつてえ！♥」

「あんな言葉信じとつたんか？ 相変わらずのポンコツやのう。ワシを最後まで疑わんかった英次と同じやあ」

「ま、まさかあ……♥」

「嘘に決まっとる。このまま臍内（なか）でいくで」

「……ツツ！ ま、待つて、お願いっ♥ お願いだから外で……♥ 今日危険日なんです……♥ 妊娠、しちゃいます、赤ちゃん出来ちゃいますうううっ♥」

「安心せえ、いざというときはワシが育てたる。ワシは議員やで、金はあるで！」

「そんな、関係、なあっ……♡」

「こないな気持ちいいまんこと一〇年ぶりにパコって、中だししないで何がセックスや！
はあはあはあ！ 出したるからなあ、お前の熟れ熟れ生マンコに特濃の精液ドピュドピュ
出して子宮の奥に届かしたるからなあ！ 卵管で精子と卵子ランデブーさせたるからなあ
……！！」

「いやあっ♡ いやいや、いやあああっ♡」

ぐじゅじゅぢゅ！ ぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくふじゅ！

パ。パ。パ。パン！ パ。パ。パ。パ。パン！

英雄は絶頂に向け、文字通り自動車のエンジンのような高速ピストンを繰り出し始めた。
一〇年前にイヤというほど味わったラストスパートに向けての腰の動きだ。

しかも、英雄は相手の腰を持ち上げたまま上から押し掛かる「種付けプレス」の姿勢で、
これを繰り返す。

逃げ出そうにも逃げ出せない。

いや、それ以前に、性感が全てを支配し、頭が真っ白で何も考えられない。

猛然と腰を振りながら、英雄が叫ぶ。

「はあはあはあ！ ワシも出る、出るぞ秋子、お前のおまんこにワシのザーメン出るぞ、

托卵済子宮に精子がたっぷり注ぎ込まれるぞ！」

「やめてえ……♥！　お願い、だからあ……っ！♥」

「ううっ、出る出る出る……うごおおおっ！」

獣のような醜い雄たけびとともに、英雄は絶頂した。

同時に、秋子の蜜壺の奥底にハメられていた男根の亀頭の先端から、勢いよく精子が放出される。

どびゅるっ！　びゅるびゅるるるっ！

どびゅびゅびゅい！　どぼどびゅどぼどびゅうう！

「アヒイイイイイイイイイイイツツ！♥」

肉棒の鈴口が子宮口に押し付けられている状態での絶頂。秋子の最も敏感な性感帯のひとつに、猛烈な勢いでドロドロの灼熱のザーメンが叩きつけられる。

それは子宮口の硬い部分にぶつかると同時ににはじき返され、空いている隙間を求めて蜜口のほうに逆流を開始する。

ただ、英雄のチンポがあまりに太くて巨大なため、膣道そのものを拡張しながらの逆流となる。

チンポの摩擦による肉悦に、膣が広がる感覚と熱さが加わり、壮絶な快感となって秋子

の全身を焼く。

もちろん、この性感に秋子が耐えられるはずなく……。

「ンヒイイッ! ♡ イグッ ♡ 英雄さんの、夫の兄のチンポでイギばず ♡ イッッグウ
ウウ!!!! ♡ ♡ ♡」

ビクッ! ビクビクビクビクッ! ビクビクッ!

英雄に押し掛かれながら……いや、それだけでなく、いつの間にか英雄の背中に両手をまわして抱きしめながら、激しく全身を痙攣させる秋子。

顎は天を突くように上を向いて舌が突き出され、素肌から汗が吹き出る。

ふたりの結合部からは、早くも秋子の肉溝に収まり切れなかった大量の精子が、ビュル! ビュルビュル! と冗談のように勢いよく逆流して噴出している。

「はひっ ♡ はひっ ♡ んひい……ッ ♡」

(ダメ……っ! ♡ やっぱり英雄さんとのセックス、気持ちが良いすぎる……!! ♡ 英次さんと比べ物にならないほど…… ♡ まして、祐一さんと、なんてえ……っ! ♡)

絶頂の快感……ジェットコースターで急上昇と急効果を繰り返すような感覚が立て続けに襲い掛かる。

身体がビクつくたびに全身の汗が弾け、あそこから逆流ザーメンが噴き出すのが分かる。

もうセックス以外したくない、という内心から湧き出る欲望が、微かに残った理性を侵食していく。

「はあはあはあ……。一〇年ぶりのおまんこ中だし射精、気持ちよかったで、秋子オ」

秋子から身を起しながら、英雄が満足げに呟いた。

射精はすでに終わっているが、肉棒はまったく硬さと大きさを失わず、滾りを続けている。

「あつ……。♥ はあつ……。♥ んあ……。あ♥」

秋子の絶頂はまだ続いている。

布団に身体を仰向けで横たえ、身体を痙攣させながら、虚ろな視線でどこかを見つめながら、息も絶え絶えに呼吸を繰り返している。

英雄の体重から解放された巨峰乳が、まるみのままに息遣いにあわせてたゆたっている。

「……反応なしか。よっぽど気持ちよかったってことや。雌を気持ちよくさせることは雄の誉れや。せやから……」

「んんおふうううう！♥」

甲高い嬌声……。英雄は秋子と繋がったまま、秋子の豊満な右のバストを、右の掌できつく握りつぶした。

「今日はまだまだ可愛がったるで、秋子」

4、

その後も、英雄は秋子を犯して犯して、犯し尽くした。

「んひいいいっ♥ そんな、後ろから、なんてえっ♥」

「なんや、お前、バックも大好きな体位だったろう。こうして四つん這いの姿勢になって、獣のように後ろからズコバコされて……ほれほれほれっ！」

「はひっ！♥ あっあっあっ♥ んはひああああっ♥」

「ふん、口ではイヤがりながら、気持ちよさそうにアンアンしておって……ヴァギナからもマン汁が出まくってシートがびしょびしょや。おまえがそんなあやから、ベッドのある二階に場所を移したんだが、意味なしやわ」

「そ、そんなこと♥ いわれてっ♥ もおっ♥」

「あとでお前がマン汁まみれのシートを全部洗濯せえ。ほれ！ 後のことは後のことや。今やとにかくもつと腰を振れ！ 托卵済マンコを締めろ！ ほれっ、ほれっ！」

パアン！ パアン！



「はひいひいっ！♥ わかりました、わかりましたからっ♥ 自分で動きますから♥ 頑張っておまんこ締めますから♥ お尻、叩かないでえええっ！♥」

ずちゅずちゅくちゅくちゅ！ ぐじゅじゅじゅ！

きゅつきゅ！ きゅつきゅつきゅっ！

「んひいひいっ♥ あっ♥ んほあああっ♥」

「どうや、バックも気持ちええやろ！」

「はひいひいっ！♥ 気持ちいいですうう♥ 前ではコスってもらえない部分をコスってもらえてますううっ！ バックも好き、好きいいっ♥」

「お、おとおっ！ 秋子のキツキツまんこが自分から動いてくれてワシも気持ちええでえ！ だったらここはどうや！？ ここはっ！？ こころはっ！？」

「はぴきゅうっ！♥ 秋子のおまんこの色んな所穿らないでええっ！♥ ちんぼまわさないでええっ！♥ 感じちやうう♥ おまんこ蠢いちやうう♥」

「おっおっおっ、また締め付けがきつなつた！ イクわ、ワシイクわ！ 出る、出る、出るウウウウ！」

どぴゅ！ どぴゅどぴゅどぴゅ！ びゅるる！

【続きは製品版でお楽しみください】